クラシカル・プレイヤーズ東京

Interview 上原彩子（ピアニスト）

ラフマニノフのスペシャリストが古楽器!?

有田正広が率いるクラシカル・プレイヤーズ東京（CPT）の2016年は、2つの貴重な公演で幕をあける。ここだけの独奏者、ここだけの楽器がコンサートを華やかに彩る。

©Hikaru.☆

有田正広／©Hikaru.☆　上原彩子／©三浦興一

奇すしき縁が上原彩子とCPTとを結ぶ

11月の室内楽公演では、しゃれた次回予告が行われた。フルートの有田正広が吹く《お気に入りの主題と変奏》。ミュラーが1800年頃に編んだ作品だ。「お気に入りの主題」とは、モーツァルトの《ピアノ協奏曲 第17番》第3楽章のテーマ。飼っていたムクドリの歌声を模したというメロディーは、とても親しみやすい。この洒脱な変奏曲は、次のオーケストラ公演を先取りしたもの。この日会場にいた聴衆への贅沢な予告編と言える。

コンサートホールで行われる2月の演奏会のプログラムには、メンデルスゾーンの《フィンガルの洞窟》序曲と交響曲第3番《スコットランド》とが並ぶが、その間にモーツァルトの《ピアノ協奏曲 第17番》が挟まれる。有田がフルートで予告した曲だ。19世紀ロマン派へのレパートリー拡張だけでなく、コンサートマスターに豊嶋泰嗣を迎えるなど、意外な音楽家とのコラボレーションでも話題を振りまくCPT。今回はピアニストの上原彩子と共演する。「これまでロシアものを中心に演奏してきました」と話す上原。なぜ「フォルテピアノでモーツァルト」を弾くことになったのか。

「集中的にラフマニノフを演奏していたころ、作品の音の多さに圧倒されて、大事なところが見えない時期がありました。モーツァルトはシンプルな分、基本が大切だし、そこがよく見える作曲家。取り組んでみようと思いましたが、どう楽譜を読んだらよいのかわからなくて。そこで、古楽器にアプローチしてヒントを得ようと思ったんです。」

フォルテピアノの奏法はもちろんのこと、曲の組み立て方、楽譜の読み方や考え方を勉強した。「現代の奏法とはかなり違っていて、それが本当に面白かった」と上原は言う。18世紀のスタイルはなるべく守りつつ、生きている音楽としてモーツァルトを表現する。そこに演奏の楽しさを見出した。その経験が今回の協奏曲で実を結ぶ。

上原は以前、第17番を演奏したことがあるという。「その時の指揮はクリストファー・ホグウッドさん。とても楽しいモーツァルトでした。」今回のメンデルスゾーン2曲は、そのホグウッドの校訂版。演奏会全体が奇すしき縁で結ばれている。

緊密な空間で行われる“室内楽”シリーズも

管弦楽公演の2週間前には、室内楽の演奏会も用意されている。オーケストラのメンバーによるアンサンブルも、もう6回目。このたびは弦楽四重奏にオーボエを加えた編成を中心に、M.ハイドンやモーツァルトの曲を披露する。三宮正満がオーボエだけでなく、同族楽器のコルノイングレーゼも吹く。英語で言えばイングリッシュホルン。オーボエよりも音域が低い。19世紀の音楽家がその独特の音色に注目し、作品の中で盛んに用いるようになるが、18世紀の後半にはすでに、その個性は認められていた。そのころの楽曲を、当時のスタイルのコルノイングレーゼで聴ける貴重な機会。会場となるシンフォニースペースの座席はわずか80。決断は早い方がよさそうだ。

取材・文：澤谷夏樹（音楽評論家）

室内楽演奏会シリーズvol.6　詳細はHPへ

カルテット+!

1月23日（土）15:00開演 シンフォニースペース

クラシカル・プレイヤーズ東京メンバー
クラシカルオーボエ：三宮正満
ヴァイオリン：木村理恵、荒木優子
ヴィオラ：成田 寛　チェロ：山本 徹

モーツァルト／オーボエ五重奏曲 ハ短調 K.406
ハイドン／コルノイングレーゼ四重奏曲 ハ長調　ほか

三宮正満

木村理恵

荒木優子
©K.Miura

成田 寛

山本 徹
©Shigeto Imura

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

東京芸術劇場Presents　詳細はP13へ

クラシカル・プレイヤーズ東京 演奏会

2月6日（土）15:00開演 コンサートホール

指揮：有田正広　フォルテピアノ：上原彩子
管弦楽：クラシカル・プレイヤーズ東京
　　ソロ・コンサートマスター：豊嶋泰嗣

メンデルスゾーン／序曲「フィンガルの洞窟」op.26
モーツァルト／ピアノ協奏曲第17番 ト長調 K.453
メンデルスゾーン／交響曲第3番 イ短調「スコットランド」op.56

有田正広
©Hikaru.☆

上原彩子
©三浦興一

豊嶋泰嗣
©Hikaru.☆

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

東京芸術劇場コンサートオペラ vol.3

サン=サーンス／歌劇『サムソンとデリラ』

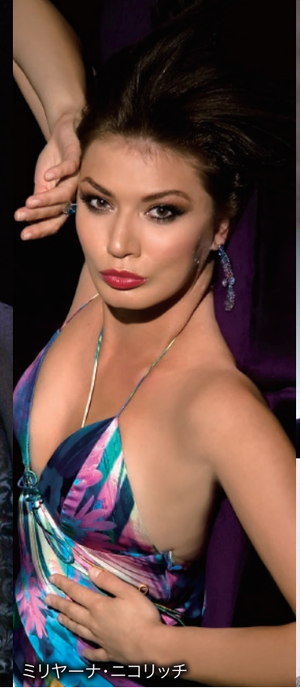
Samson et Dalila

フランス語全3幕＊演奏会形式（日本語字幕つき）

CAMILLE SAINT-SAËNS "SAMSON ET DALILA" EN 3ACTES VERSION CONCERT

佐藤正浩

ロザリオ・ラ・スピナ


ミリヤーナ・ニコリッチ

妻屋秀和

鈴木俊介

甲斐栄次郎

井出壮志朗

ジョン・ハオ

小笠原一規

Interview 佐藤正浩（指揮者）

国内外から実力派歌手を揃えて実現する『サムソンとデリラ』。フランス・オペラの醍醐味とサン=サーンスの音楽をじっくり味わえる貴重な公演。その魅力を、佐藤正浩が語る。

オーケストラがドラマを語る色彩豊かな楽曲

2013年にバルトークの<青ひげ公の城>でスタートした芸劇コンサートオペラ。第2弾は日本初となるフランス語5幕版による<ドン・カルロス>が上演され、日本のオペラ界に大きな衝撃を与えた。その公演を指揮した佐藤正浩が、2016年2月に再び話題作に挑戦する。日本では上演の機会が極めて少ない<サムソンとデリラ>だ。

「<ドン・カルロス>は、1996年にパリのシャトレ座で上演されたフランス語5幕版を見て、ヴェルディが書きたかったのはこういう音楽だったのだと、曲を再発見し、以来、いつか日本で上演したいと思っていたのがこの劇場で実現しました。次の演目を考えたとき、このシリーズではなかなか舞台では実現が難しい作品をやったらいいのではないか、1回のみの公演だし、予算は限られる。でも他の劇場では見ることが難しい珍しい作品を上演したいと思いました。

<サムソンとデリラ>は、3幕に出てくるバッカナーレが有名だし、デリラが歌う<あなたの御声にわが心は開く>という妖艶なアリアもある。オーケストラの色彩が豊かで、管弦楽の魅力を充分に聴ける曲。それ以外にもアンサンブルや合唱の魅力もある。フランスらしい響きとドラマティックな部分がみごとに書き分けられていて、オーケストラがドラマを語っている。管弦楽と合唱とソリストの対話がとても上手く書かれた曲です。それに、いつもどんでん返しのある音楽なので、すさまじい浮き沈みのあるドラマを堪能していただけると思います」

理想のサムソン、芳醇な声と美貌のデリラ

この曲の上演が少ないのは、主役のサムソンは輝かしく力強い声のテノールが求められ、デリラもまた魅惑的な声に加え、美しい容姿も必要とされる難役だからだ。理想的な主役歌手二人を揃えるのは至難のわざだが、今回は声だけでなく容姿も揃った実力派歌手が集められた。

「サムソンを歌うロザリオ・ラ・スピナと、デリラを歌うミリヤーナ・ニコリッチはご夫婦で、ぼくがお願いして出ていただきます。ロザリオは2012年11月から翌年2月にかけて5都市共同制作公演でやった<カルメン>で、ドン・ホセを歌ったテノールです。金沢と福井はぼくが指揮して、彼とは一緒に音楽を作りあげていったので、彼の声とか作品に対する真摯な姿勢をよく知っています。立派な体格なので、彼なら力強い英雄のサムソンにぴったり。ぼくの理想のサムソン像を具現化してくれると思います。デリラ役のニコリッチにはストーリーがあるんです。じつは4年前の<カルメン>は、お二人で歌う予定だった。それで宣伝を兼ねて、公演の半年前に来日し、ラ・フォル・ジュルネでリサイタルをしたんです、ぼくがピアノを弾いて。とても豊醇な声で容姿も美しい。すでにメトロポリタン歌劇場でカルメンを歌っている実力派のメゾ・ソプラノです。でもその後に妊娠して、日本でカルメンは歌えなかった。ですから、来年は待望の来日です。デリラを歌うにはすばらしく妖艶で、しかも毒もないといけない。彼女は両方持ち合わせている歌手です」

今回の公演では日本からも名人級の歌手たちが集められた。オーケストラや合唱団も、佐藤正浩がこだわりぬいたメンバーが結集する。

「老ヘブライ人役の妻屋秀和さんは、独特な深い響きと説得力ある安定した歌唱のバス。混乱のなかで、ポッと光を与えるようなゆったりした歌が要求される、存在感のある役にはぴったりです。大司祭役の甲斐栄次郎さんはウィーン国立歌劇場で長年キャリアを積まれた方ですので、キャラクター表現にも秀でている。輝きのある響きをもったバリトンです。

この曲はまるでオラトリオのように合唱がとても重要。武蔵野音大の合唱団は<ドン・カルロス>でも素晴らしい演奏をしてくれたので、今回も無理をいってお願いしました。オーケストラは10年ほど前に、オペラの演奏をするために、オペラ好きのメンバーに集まってもらって結成した、ザ・オペラ・バンド。普段はN響や読響で弾いている方たちです」

伝統的なオペラ指揮者の道を通って

日本のオペラ界で、近年急激に頭角を現してきた佐藤正浩。日本では数少ないオペラの専門指揮者として、重要なシーンには欠かせないマエストロである。ヨーロッパでオペラ指揮者を目指すには、オペラ・ハウスで研鑽を積むのが伝統的な方法。カラヤンやクライバーもその道を通った。

「ぼくの場合は指揮といってもオペラに特化している。もちろんシンフォニーもやりますが。でもオペラは時間がかかる。1つの公演をやるのに、1ヶ月や2ヶ月はその公演にかかりきることになりますから大変です。ぼくはもともと、指揮者を目指したわけではないんです。音大の声楽科を出たので、歌手の勉強をしていました。その後、海外に出てコレペティトーア（歌手のトレーニングやリハーサルをピアノを弾いて指導。略してコレペティ）として指揮者のもとで振り方を見ながらピアノを弾くうちに、自分でもやってみようという思いが強くなった。まずサンフランシスコ歌劇場でコレペティとして仕事をし、ヨーロッパに出たかったので、リヨン歌劇場のオーディションを受けた。その頃ケント・ナガノが音楽監督で、リヨンの歌劇場は武満徹さんに新作オペラを委嘱していた。そんな時期だったので、日本語ができるぼくが採用されたのだと思います。でも武満さんはオペラが完成する前に亡くなってしまわれたのですが。リヨンのあとは、シャトレ座でコレペティをやっていたのですが、自然に指揮の方へと移行することになりました。結果としてそれがヨーロッパの伝統的な指揮者になるコースだったんですが、最初から日本で指揮者になろうと思ったら、こういう道は通らなかったと思います」

佐藤正浩が得意とするのは、フランス・オペラ。日本ではイタリア・オペラやドイツ・オペラに比べて、演奏される機会が少ないジャンルだ。

「オペラのドラマを組み立てていくのは、言葉だと思うので、自分にとってはフランス語が一番自然。フランス・オペラはまだ日本で上演される機会が少ない作品が多いので、もっと指揮したい。マスネ、プーランク、さらにフランス語ということでプロコフィエフの<3つのオレンジへの恋>、また<アッシジの聖フランチェスコ>なども上演してみたいです」

シリーズはコンサートオペラと銘打っているが、今回の公演では演出の要素も少し付け加えてみたいという。

「演奏会形式ですので、まず歌がしっかりしていないと。見せる要素はないので、素材でせめていかないといけない。でもそれだけ音楽に集中して聴くことができるのが利点です。ドラマが激しいオペラなので、音の渦のなかに入っていただいて、音楽を堪能していただけたらと思います。でもこのオペラは最後に"神殿崩し"という見せ場がある。一度は怪力を失ったサムソンが最後に力を振り絞って、力で神殿を崩壊させる。特にこの場面は、何か目で見て楽しめるような演出的工夫ができないか、現在、思案しているところです。どうぞお楽しみに！」

取材・文：石戸谷結子（音楽評論家）

2月20日（土）15:00開演 コンサートホール

詳細はP14へ

指揮：佐藤正浩
サムソン：ロザリオ・ラ・スピナ　デリラ：ミリヤーナ・ニコリッチ
大司祭：甲斐栄次郎　アビメレク：ジョン・ハオ　老ヘブライ人：妻屋秀和
伝令：小笠原一規　ペリシテ人1：鈴木俊介
ペリシテ人2：井出壮志朗　管弦楽：ザ・オペラ・バンド
コーラス：武蔵野音楽大学　合唱指導：横山修司

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）